広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	漱石の創作態度の一側面 ： 代助の人物造型を中心にして
Author(s)	王, 志松
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1989 : 55 - 59
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039263
Right	
Relation	

漱石の創作態度の一側面

代助の人物造型を中心にして

王　志松

漱石研究は、総じて、人物、あるいは作品の持つ観念的な意味と象徴を掘り下げるところに重点を置いている傾向がある。形象としての人物の検討は十分とは言えない。反面に、漱石の多くの小説の世界は、形象としての人物より観念的な問題意識の方が表に出ていることも裏づけられていると言えるであろう。このような作者の創作傾向は、《それから》の代助の造型において特に目立っている。ここで、この人物の造型と「自然」の思想との関連をめぐって、作者の創作態度の一側面を探ってみたいと思う。

〈一〉

代助は、作品の中で単に主人公の役割を持つだけではなくて、彼の目を通してまわりの人間や物事などを評価したり、判断したりするという語り手の特性をも帯びているユニークな人物である。この人物をどう把握するかは、作品全体の理解にもかかわってくる重要な問題である。それでは、この人物はどういうふうに造型されているのかというと、作者のこの人物についての設定から見てみよう。

代助は、大学を出て、実業家の父と兄からの仕送りで一家を構え、ばあやと書生を置いている結構な身分であり、三十歳になっても、結婚もしなければ、職にもつかない「高等遊民」の生活をしている。そんな彼の無為な生活の中で、突然、三年ほどの関西生活を切りあげて上京してきた大学時代の友人平岡と妻三千代が現われた。代助は昔三千代に心をひかれていたが、義侠心のために、三千代を平岡に嫁ぐように斡旋した。その時、それを非常に名誉に思った。しかし、今度上京した三千代と再会して、心の奥に潜んでいる愛がまた蘇ってきた。代助は生きなおすために、「自然」にしたがおうと思った。愛の物語はここから始まった。

作品の中で重要な意味を持つ「自然」の思想はいったい何であろうか。漱石はこれを十分に明らかにしていないが、すくなくとも、「人の掟」「世間の掟」というような社会習俗的なものと対立している、一種の自然法的、それ故に原初的で無垢な人間関係をさす意味が含まれているだろう。ここから、既成の道徳観の否定、恋愛、結婚の人為的形式の破棄が生まれた。三千代との関係について、代助はこう判断している：「結婚は、道徳の形式において自分と三千代を遮断するが、道徳の内容において、何等の影響を二人のうえに及ぼしそうもない」（岩波版《夏目漱石全集》第四P540；以下の引用文も同書による）。ただし、ここにはまだ問題がある。道徳は本来社会の秩序を維持するための一種の精神的な約束である。人間は社会の中で道徳なしには生きていけないのは言うまでもない。だから、ここでの既成道徳観の否定といっても、すべての道徳観を否定することを意味していないであろう。否定すべきなのは、ただ不合理の部分だけである。それで、平岡と三千代の結婚は、ただの形式的なものなのかと問わなければならなくなる。

小説の描写から見れば，二人の結婚は誰かに強制されたことはまずない。代助は昔三千代を愛していただろうが，平岡もたしかに三千代を愛していた。そしてこれを代助に告白した。三千代の家は別に資産家でもないので，平岡はほかに何かを目あてにして結婚したとは考えられない。結婚してからも平岡は三千代を愛しつづけているのである。それは，子供を失った三千代が心臓病にかかって，もう根治できないという医者の宣告を聞いて，平岡が「驚いて，できるだけ養生に手を尽した」という描写から伺える。態度が曖昧なのは三千代である。彼女は昔代助にひかれていたのは，作品の描述からうすうす感じられるが，全然平岡を愛していなかったという描写はない。もちろん，これは，作品の視点が代助にあることにもかかわっているが，とにかく平岡との結婚は，彼女本人の同意を得た上でのことであろう。後で，子を失ったことや，平岡が社会で失敗したことなどは二人の結婚生活に暗い影をおとしたが，夫婦はいつも順境にいるわけではない。逆境にいることもあるはずである。逆境にいると，すぐ裂ける夫婦関係を封建的な結婚と断定するのはおかしい。百歩退いて，二人の結婚は本来形式的なものであるというならば，そのような不幸な婚姻を造った張本人は，ほかでもなく代助と三千代である。このあやまちについての代助の辯解は，「若いころの義侠心」である。今は「あの時のことを思っては，非常な後悔の念に襲われている」（P 605）。平岡のところから三千代を奪いとることによって，自分のあやまちを直そうとするのは，代助の今の考えである。たしかに，封建的な義侠心のために，あやまちを犯した代助には不幸な一面があるが，しかし，三千代を奪われると，平岡にもまた不幸な一面も出てくる。これを，リアリスティックに描けば，その中に含まれた道徳、友情、家庭、人間の存在意義などの問題がおのずと出てくるであろう。

残念ながら，作者は作品の中で，代助にかたよってこれを描いているのである。越智治雄氏は，代助の「自然」や三千代への愛情は，彼の自己正当化のための心理的な詐術であると指摘しているが（注1），私は，代助よりも作者は代助の行動を正当化させるために，「自然」という曖昧な概念を使ったのである。そして，この「自然」の思想に否定されるための平岡と三千代の結婚を，また同じ曖昧さの中で，ただの形式的なもののように描いてしまった。

〈二〉

平岡と三千代との結婚を否定し，代助と三千代の愛を成立させようとしているのは，作者の基本的な態度である。

代助がずっと独身を通しているのは，ほかにも原因があるが，一番主な原因は，三千代に対する未練である。再会した後，その未練は確実な愛に変った。ただし，三千代はもう昔と違って，平岡と結婚している人妻である。人妻を愛することは，いうまでもなく，罪である。そこで，代助はこの罪意識を排除するための一種の心理的な詐術を使った。作品には，代助は「近来持ち上がった結婚問題を避けるために，旅行でもしようと思った一節がある。そこで「平岡の事が妙に氣にかかって，転地する計画をすぐ打ち消してしまった。それをよく煎じつめてみると，平岡の事が氣にかかるのではない、やはり三千代の事が

気にかかるのである。代助はそこまで押してきても、別段不徳義とは感じなかった。むしろ愉快な心持ちがした。」「愉快な心持ちがした」のは，旅行に出かけるつもりの費用を困窮する三千代に援助したからである。ここでは，まず不自然なのは，平岡一家への心配と援助は，平岡と三千代に別々に分けられたことである。これは三千代への愛情の流露と言うよりほかはない。ただし，この罪のあるべき愛情を，崇高な援助に偽ったから，「不徳義とは感じな」いですんだのである。この心理的な詐術の下で，百合の香や昔の回想などの要素が加わって，小説に溢ちている「欲得」もなく，「利害」もない純粋な「誠の愛」の雰囲気は巧妙に醸し出された。

しかし，このような心理的な詐術だけでは二人の愛を成立させるにはまだ不十分である。平岡と三千代の結婚の基礎を壊さなければならない。その有効な方法は，夫の平岡を悪く造型するということである。平岡は，悪ければ悪いほど，三千代は哀れになる。代助の三千代への援助も，ますます崇高になる。三千代に愛を告白するところになると，三千代と平岡の結婚を否定するすべての条件がもう揃った。「この結果の一部分を三千代の病気に帰した。……またその一部分を子供の死亡に帰した。それから，他の一部分を平岡の遊蕩に帰した。また他の一部分を会社員としての平岡の失敗に帰した。最後に、残りの一部分を平岡の放埒から生じた経済事状に帰した。すべてを概括したうえで，平岡はもらうべからざる人をもらい，三千代は嫁ぐべからざる人に嫁いだのだ」。こうなってくると，代助は，三千代を平岡から奪いとるのは，罪どころか，不幸な人間を救い出す英雄の豪挙のようにも見えてきた。

作者は，二人の「誠の愛」を成立させるために全力を挙げたが，一方では，代助はやはりこれに対して，なんらかの罪意識を持っているようである。前述した代助の心理的な詐術は，罪意識への恐怖の表れではないか。しかし，作者は，その罪意識の奥に含まれた意義を探らないで，ただその心理的な詐術から「誠の愛」の一面を取っただけで，その他の罪意識の一面を排除した。理論の上で，排除の役割をよく果たしたのは，この「自然」の思想である。小説の最後に代助が平岡にあやまる場面を見てみよう。

『すると君は自分のしたことを悪いと思ってるんだね』(と平岡は代助に聞いた。

『無論』

『悪いと思いながら今日迄歩を進めて来たんだね』と平岡は重ねて聞いた。語気は，前よりも稍切迫していた。

『そうだ，だから，此事に対して，君の僕等に与えようとする制裁は潔よく受ける覚悟だ。今のは，ただ事実をそのまま話した丈で，君の処分の材料にする考えだ。』

ここでは，代助は自分のしたことを悪いと思っていると認めた。彼の「悪い」と思った心理には，間違いなく罪意識が潜んでいる。しかし，それまでの描写には，どこでも悪いと思った所を見だすことができない。あるのは，正義が代助の側にあるという事ばかりで，悪い方は，世の中と平岡である。ここで作者はやっと代助の心理深層に潜んだ罪意識を表に少し出した。しかし，これ以上出すと，また姦通と批

判されるのを恐れるかのように，筆を一転して，代助に自己辯解させた。「矛盾かもしれない。然し，それは世間の掟と定めてある夫婦関係と，自然の事実として成り上がった夫婦関係とが一致しなかったと云う矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として，三千代さんの夫たる君に詫まる。然し，僕の行為そのものに対しては矛盾も何も犯していないつもりだ。」（P607）これはあやまるのではなくて，堂々と自分のしたことの正当性を主張している口調である，これを聞いて，代助のどこが悪いのか，また分らなくなった。その辯解はあまりにも理論的すぎただけに，人物は，かえって読者から遠ざかっていった。そこで響いたのは，ただ作者の声だけである。これは，「自然」の思想が代助の罪意識を排除した典型的な例である。結局，代助は，人物としての独自性を失って，このように「自然」という概念に流されてしまった。代助の感情的な側面の欠如や、会話の作為性などの原因はここにあるのだろうと思う（注2）。

もう一方，作者は「自然」の理論の限界をも洞察していて，最後に代助を破局に陥入れた。しかし，破碇の原因は，前の罪意識の描写を避けるのと同じように，ただ悪勢力の強すぎる社会に求めただけで，三千代と代助の愛そのものの中は全然問わなかった，これは，もっと深い意味での人間と人間、人間と社会の関係を探ることを妨げた。

〈三〉

作品の中で，こういうふうに代助を造型して，そして，「自然」の理論を用いて，二人の愛を成立させることによって，作者のなんらかの考え方を表そうとするのは，作者の文学観と無関係ではない。

明治22年子規宛の書簡には次の一節がある。

「今世の小説家を以て自称する輩は少しも『オリヂナル』の思想なく只文字の末をのみ研鑽批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をきせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模様仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の価値はと問はば三文にも当せず其の思想はと問はば一顧の価なきのみならず鼻をつまんで却走せざるを得ざる者のみの様に被思候（中略）小生の考にては文壇に立て赤幟を万世に翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熟し腹に満ちたる上は直に筆を揮って其思う所を叙し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法抔は次の次の其次に考ふべき事にて Idea itself の価値を増減スル程の事は無之様に被存候。」（明22．12．31）

ここで，作者は作品を思想と形式に二分して，作品の命は思想にあることを主張している。作者のこのような文学観が一生の文学創作を貫いていることは，すでに平岡敏夫氏が指摘された（注3）。それで，《それから》の中で表そうとする思想は何であるかというと，まず，作者がこの小説のために書いた予告文から見てみよう。

「いろいろな意味においてそれからである。「三四郎」には大学生の事を描いたが，この小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。「三四郎」の主人公はあの通り単純であるが，この主人公はそれから後の男であるからこの点においても，それからである。この主人公は最後に，妙な運命に陥る。それからさきどうなるかは書いてない。

この意味においてもまたそれからである。」

解題のような短い文章であるが，《三四郎》との関連性及び「あの通り単純」な三四郎の「後の男」を造型することを通して，何かを探求しようとする作者の意図がうかがわれる。

《三四郎》に，熊本高校を卒業し，東京の大学に入った一人の若者を登場させて，上京の体験を通して，その時代の絵巻を広げて見せた。恋愛小説であるが，その中核は明治の近代開化への批評である。作中のことばを借りて言えば，「明治の思想は，西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰り返している」。このような動揺の中で，主人公は，母の象徴する家族制度の古い世界と，静かな月日を重ねてつもった貴い塵にまみれている学問の世界と，若い女性でまばゆい現実の世界の前に戸惑いを覚えた。

《それから》の中で，その批評の色が一層濃厚になった。代助が考えるところによると，世界列強に立ちおくれて出発した日本は，日露戦争に勝った後では，無理にも一等国の仲間入りをしようとしている。これは「牛と競争をする蛙と同じ事で……腹が裂けるよ。その影響はみんな我々個人の上に反射している……こう西洋の圧迫を受ける国民は，頭に余裕がないから，碌な仕事は出来ない……精神の困憊と，身体の衰弱とは不幸にして伴なっている。のみならず，道徳の敗退もいっしょに来ている」（P403）。これを背景にして，代助という人物を登場させたのである，代助の悲劇は，社会に対する深刻な認識を持っていても，自分の力でこれを変えられないところにある。そして，このような認識を持っているからこそ，盲目に社会に入って，世間の俗物と同じにいたずらに自己の人間内容を汚濁したくない，「高等遊民」をしなくてはいられないところにある。このような「外発的な」明治の近代開化への対抗として「自然」の理論を持ち出したのである，この理論は，まわりの醜悪、弊病を照らし出し，批評する役割を実に大いに果たした。

もともと，「自然」の理論を持ち出すことによって，《それから》は，明治の偽装的な文明開化を批判するという狭いテーマを超えた，自然と意志との対立，心情と理性との背反、個人と社会との相剋などの人間存在の根源にある謎をさぐる可能性があるはずである，ただし，作者の探求が，性急なため，作中の人物を十分に形象化しえなかった。作品では，人間の自然的な存在と，それゆえに含まれた人間存在の根源的な問題よりも，探求の便宜のため，造り出したやや作為的な人間の存在と，それを一生懸命に探求している作者の姿勢が，まず目にとまるのである。

《それから》を読むたびに，作者の思想の深邃さ、その観察の鋭敏さに感服しないではいられないと同時に，その思想を理論的に整理しようとする創作方法は，また創作の自然性を阻碍しないこともない，その自然性の中に含まれた生命そのものとして，より深遠な意味を探ることを弱めないこともないと，思う。

注1：越智治雄「『それから』論」（「漱石私論」昭和46、6、角川書店）
注2：小宮豊隆「『それから』を読む」阿部次郎「『それから』を読む」（ともに「影と声」明44、3、春陽堂）
注3：平岡敏夫「漱石と紅葉」（「漱石研究」1987年9、1、有精堂）